≪2021 年 10 月　公開サロン（通算 300 回）報告≫

＊＊

サロンファミリーが感じた TOKYO2020

－月例サロン 300 回記念－

川戸 湧也 （仙台大学／全日本柔道連盟科学研究部）
赤城 翼 （国際武道大学 3 年･水泳部）
岸 卓巨 （一般社団法人 A-GOAL 代表理事／日本ｱﾝﾁ･ﾄﾞｰﾋﾟﾝｸﾞ機構職員）
小松 章一 （行政書士／TOKYO 2020 ボランティア）
梅澤 佳子 （多摩大学）
小池 靖 （会社員／在さいたま市サッカースポーツ少年団指導者）

＊＊

【日　時】2021 年 10 月 22 日（金）19：30～21：30（終了後はオンライン懇親会～23：30）
【会　場】オンライン（Zoom）
【テーマと演者】サロンファミリーが感じた TOKYO 2020－月例サロン 300 回記念
１）柔道のサポートチームとして：川戸湧也（仙台大学／全日本柔道連盟科学研究部）
２）水泳競技のボランティアとして：赤城翼（国際武道大学 3 年・水泳部）　※紹介者：嶋崎雅規
３）TOKYO 2020 を振り返って：岸卓巨（(一社)A-GOAL 代表理事／日本ｱﾝﾁ・ﾄﾞｰﾋﾟﾝｸﾞ機構職員）
４）無観客開催によるボランティアへの影響：小松章一（行政書士／TOKYO 2020 ボランティア）
５）自転車競技「ﾛｰﾄﾞﾚｰｽ」応援ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ－6 大学連携と多摩大学の活動報告：梅澤佳子(多摩大学)
６）オリンピズム再考：小池靖（会社員／在さいたま市サッカースポーツ少年団指導者）
【参加者（サロンファミリー）16 名】　注）★は NPO 会員
★安藤裕一（GMSS ヒューマンラボ／医師）、★梅澤佳子（多摩大学）、川戸湧也（仙台大学）、★岸卓巨（A-GOAL 代表）、小池靖（在さいたま市サッカースポーツ少年団指導者）、小松章一（行政書士）、★嶋崎雅規（国際武道大学／NPO サロン理事）、鈴木崇正（NEC 勤務、サロン古株です）、★関秀忠（弁護士／NPO サロン理事）、田島璃子（早稲田大学文化構想学部 2 年／NPO サロン事務局）、★茅野英一（NPO サロン監事／元帝京大学教授）、★中塚義実（筑波学附属高校／NPO サロン理事長）、本郷由希（会社員）、守屋佐栄（なでしこリーグスフィーダ世田谷サポ、歩くサッカーの愛好家）、★守屋俊秀（世田谷サッカー協会／２級審判）、吉原尊男
【参加者（サロンファミリー以外）　9 名】　注）確認が取れた方のみ
赤城 翼（国際武道大学水泳部）、内田裕之（自由学園男子部高等科）、各務吏織（自由学園女子部高等科 3 年／国際ピエール・ド・クーベルタン YF 日本代表）、川島健司（読売新聞）、真田久（筑波大学特任教授／CORE 事務局長）、土居陽治郎（国際武道大学）、二村綾香（JAPAN サッカーカレッジ学生）、松田龍眞（国際武道大学水泳部）、山田恵子（自由学園女子部）
【報告書作成者】守屋俊秀ほか

【概　要（理事長より）】　※公開サロン 2021-10 案内より

サロン 2002 の「月例会」は 1997 年度よりほぼ毎月行われ、今回が通算 300 回目となります。今年度より「月例サロン」に改め、今回は多くの方にご参加いただく「公開サロン」として開催します。

記念すべき通算 300 回のトピックは TOKYO 2020 です。開催前から課題山積だった TOKYO 2020 は、緊急事態宣言の中、原則無観客で開催されました。オリンピックもパラリンピックも終わったいま、大会そのものを総括し、あとに残していくものを議論していく段階です。それは、誰かにお任せするのでなく、あらゆる人が、さまざまなレベルで行っていくべきでしょう。

「スポーツを通しての“ゆたかなくらしづくり”」を“志”に掲げるサロン 2002 ファミリーは、多種多様な人々のネットワークです。すべての人が新型コロナのパンデミックに向き合い、東京オリンピック、パラリンピックを、それぞれのスタイルで体験しました。今回は、サロンファミリー（とそのまわりの方々）が体験し、感じ、考えた TOKYO 2020 をざっくばらんに語り合う企画です。

ボランティアとして関わった方、競技運営に携わった方、大学や高校の指導現場の様子、若い方々の視点…。さまざまな角度から今夏を振り返りたいと思います。

【内容と進行】

１．オープニング（19：30～19：40）

月例サロン 300 回／本日のテーマ設定の背景…中塚義実（NPO サロン理事長／筑波大学附属高校）

２．サロンファミリーが感じた TOKYO 2020

◇前半：競技会のまわりで（19：40～20：30）

１）柔道のサポートチームとして：川戸湧也（仙台大学／全日本柔道連盟科学研究部）

２）水泳競技のボランティアとして：赤城翼（国際武道大学 3 年・水泳部）　※紹介者：嶋崎雅規

３）TOKYO 2020 を振り返って：岸卓巨（(一社)A-GOAL 代表理事／日本ｱﾝﾁ・ﾄﾞｰﾋﾟﾝｸﾞ機構職員）

◇後半：市民の立場から（20：30～21：20）

４）無観客開催によるボランティアへの影響：小松章一（行政書士／TOKYO 2020 ボランティア）

５）自転車競技「ﾛｰﾄﾞﾚｰｽ」応援ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ－6 大学連携と多摩大学の活動報告：梅澤佳子(多摩大学)

６）オリンピズム再考：小池靖（会社員／在さいたま市サッカースポーツ少年団指導者）

３．ざっくばらんな意見交換　⇒　オンライン懇親会（21：30～）

＜参考：サロン 2002 月例会・月例サロン一覧（1997 年度と 2020～2021）＞

サロン2002月例会一覧（1997～2021）

2021.10.23

回数	年	期日	会場	テ　ー　マ　（報告・問題提起者）
（1997年度）				
第1回	1997	4.18.	お茶大	1.日本サッカーにおけるナショナルアイデンティティーの確立に関する研究(高橋義雄)
				2.韓国社会と2002年ワールドカップ(韓国研究者の研究発表紹介－中塚義実)
				3.スポンサーの立場からみた巨大スポーツイベント(榎竜一)
第2回		5.16.	お茶大	サッカーくじについて(高橋義雄／三枝潔貴)
第3回		6.20.	カリンカ	台風のため中止 → 来てしまった人はそのままカリンカへ
第4回		7.18.	お茶大	スポーツイベント雑感－スポーツイベントについて考えたこと-頂べたこと(仲澤眞)
第5回		8.17.～18.	Jヴィレッジ	1.待ち株会社解禁とプロサッカークラブの経営(井上俊也)
				2.国際スポーツイベントへの政府の関与(高橋義雄)
				3.スポーツカウンセラーの教育・研修に関するJリーグアンケート調査(坂中尚哉)
				4.2002年ワールドカップの練習会場について(中塚義実／高橋義雄)
第6回		9.18.	筑波大附高	2002年ワールドカップの練習会場(キャンプ地)について(宮村関史)
第7回		10.17.	筑波大附高	サッカーを取り巻く雑業について－プロ選手のセカンドキャリアを考える(大場眼子)
第8回		11.21.	筑波大附高	ユース(以下の)年代のサッカーを考える(中塚義実)
第9回		12.19	筑波大附高	スポンサーからみたFIFAワールドカップ(花目一成)
第10回	1998	1.29.	筑波大附高	1.タレント発掘の観点からみたサッカー環境とは(中塚義実)
				2.プロサッカー選手に対するキャリアカウンセリング(木幡日出男)
第11回		2.20.	筑波大附高	1.審判活動における心理的影響に関する研究(坂中尚哉)
				2.横浜プロジェクト報告及び検討(木下昭英)
第12回		3.20.	筑波大附高	1.Jリーグ球団をめぐる組織間関係の形成過程に関する研究(戸苅次郎)
				2.高知県サッカーの動向について(中塚義彦)

（2020年度）				
第282回		4.28.	オンライン(ZOOM)	「新型コロナ」にどう向き合うか①－学校・職場(上自宅)・スポーツイベント(中塚義実、笹原勉、信田仁)
第283回		5.29.	オンライン(ZOOM)	「新型コロナ」にどう向き合うか②－部活動・市民イベント・障がい者の現場より(嶋崎雅規、本多充己、浅見明子)
第284回		6.20.	オンライン(ZOOM)	総会後の意見交換会
第285回		7.8.	オンライン(ZOOM)	「with コロナ」の時代に向けて①－2020年度のU-18フットサルをめぐって(中塚義実、本多充己)
第286回		8.23.	オンライン(ZOOM)	「with コロナ」の時代に向けて②－スポーツは人々のライフラインとなれるか【アフリカ編】(岸卓巨)
第287回		9.25.	オンライン(ZOOM)	「with コロナ」の時代に向けて③－地域スポーツクラブの現場より-ドクターの視点から(安藤裕一)
第288回		10.29.	オンライン(ZOOM)	「with コロナ」の時代に向けて④－日本におけるスポーツボランティアの経緯と今後(小松章一)
第289回		11.19.	オンライン(ZOOM)	「with コロナ」の時代に向けて⑤ －運動部活動における「大会」の意味・意義を考える(鎌倉紀裕★、嶋崎雅規、中塚義実)
第290回		12.13. AM	オンライン(ZOOM)	公開シンポジウム「With/Afterコロナ」の時代に向けて－コロナ後でみえた“ゆたかなくらし”の新しいすがた 第1部 「イベント」を中心に(宇都宮徹壱、土谷孝、本多充己、中塚義実)
		12.13. PM	オンライン(ZOOM)	公開シンポジウム「With/Afterコロナ」の時代に向けて－コロナ後でみえた“ゆたかなくらし”の新しいすがた 第2部 「新しい日常」を中心に(田中理恵、春日大樹、岸卓巨、中塚義実)
第291回	2021	1.28.	オンライン(ZOOM)	第5回U-18フットサルリーグチャンピオンズカップを振り返って(中塚義実、本多充己、日島瑛子)
第292回		2.18.	オンライン(ZOOM)	サロン2002のこれからを考える－情報発信プロジェクトからの問題提起(信田仁ほか)
第293回		3.13.	オンライン(ZOOM)	東京都におけるU-18フットサルの20年－2001～2020のあゆみとこれから(中塚義実ほか)
（2021年度）				
第294回		4.16.	オンライン(ZOOM)	サロン2002のこれからを考える②－理事長からの問題提起(中塚義実ほか)
第295回		5.13.	オンライン(ZOOM)	どうなる、東京オリンピック・パラリンピック －2020～21のスポーツイベントの実施状況から考える(嶋崎雅規、信田仁)
第296回		6.19.	オンライン(ZOOM)	総会後の意見交換会
第297回		7.16.	オンライン(ZOOM)	番狂下でのスポーツ活動2.0(安松鈴鹿)
第298回		8.23.	オンライン(ZOOM)	日本初の女子プロサッカーリーグ“WEリーグ”を語ろう！(岡島喜久子★、中塚義実※)
第299回		9.13.	オンライン(ZOOM)	スポーツにおけるマウスガード の効用(高橋西嗣★、愛秀忠※)
第300回		10.23.	オンライン(ZOOM)	サロンファミリーが感じたtokyo2020－月例サロン300回記念 （川戸湧也、赤城翼★、岸卓巨、小松章一、梅澤佳子、小池靖）
第301回		11.6.	オンライン(ZOOM)	公開シンポジウム①「安心・安全なサッカーのために－育成年代でのヘディング容認のためのガイドラインを中心に」(中山雅雄★、石堂貴秀★、相浦武俊★、関秀忠※)
第302回		12.11.	オンライン(ZOOM)	公開シンポジウム②「JFA100周年・2021年の総括と展望－TOKYO 2020、WEリーグ、そしてコロナ後へ」 （賀川浩、加藤寛★、川島健司★、中塚義実）
				注)★は月例サロンの特点でサロンファミリー以外の方　※はコーディネーター

Ⅰ．前半：競技場のまわりで

1．柔道のサポートチームとして

川戸湧也（仙台大学／全日本柔道連盟科学研究部）

仙台大学の川戸です。本日は仙台大学教員としてではなく、全柔連の科学研究部の人間としてお話します。

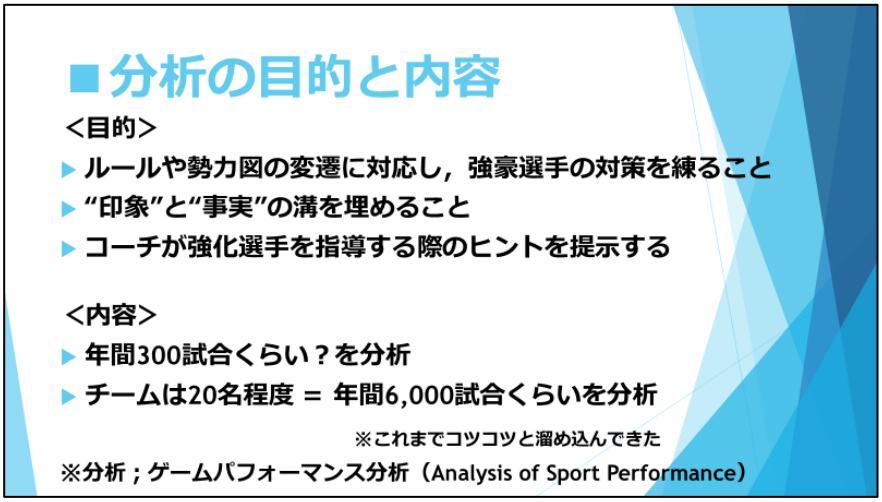
初めての方もいらっしゃるので、簡単な自己紹介のスライドも作りました。2010 年に筑波大学に入学、修士、博士と大学院に行きました。2014 年、修士課程に進んだ年から JOC の強化スタッフとして活動、アナリストとしてリオと東京オリンピックに携わりました。

今回はスポーツアナリストとして東京オリンピックに関わったお話です。柔道競技の裏側、TOKYO2020 での我々の取り組みです。

私自身はアナリストとして活動しています。アナリストですから分析を使命として負っていますが、分析の目的と内容について簡単にお話しします。

まず目的としては、ルールや勢力図の変遷、強い選手が引退したとか、今まで若かった選手が非常に力を付けたりとか、そういった勢力図の変化に対応して、日本選手のライバルになる強豪選手の対策を練ることを目的としています。それから「印象と事実の溝を埋める」と我々は言っていますが、なんかあいつ強いなとか、なんかあいつ得意そうだよなとか、コーチ、あるいは選手であれば誰でもが持っている「印象」というのがありますが、はたしてそれは「事実」なのか。我々が分析した結果を基に、印象と事実に相違はあるのか、あるいはその印象というのはらしいものか、という溝を埋める作業を担っていると自負しています。

我々の分析データは、選手に直接渡すのではなく、あくまでコーチに渡します。コーチが考えて選手に指導する、その時のヒントになるようなものを提示することを目指して活動してきました。



何をしているかというと、私自個人として年間 150 試合ぐらいを分析しています。我々のチームは 20 人ぐらいいるので、およそ 3,000 試合。数が多すぎて正しい数値かわかりませんが、いずれにしてもかなりの数の試合を視聴し

て、どういう技が使われて、戦術がどう変化しているか、ということを分析、検討してきました。

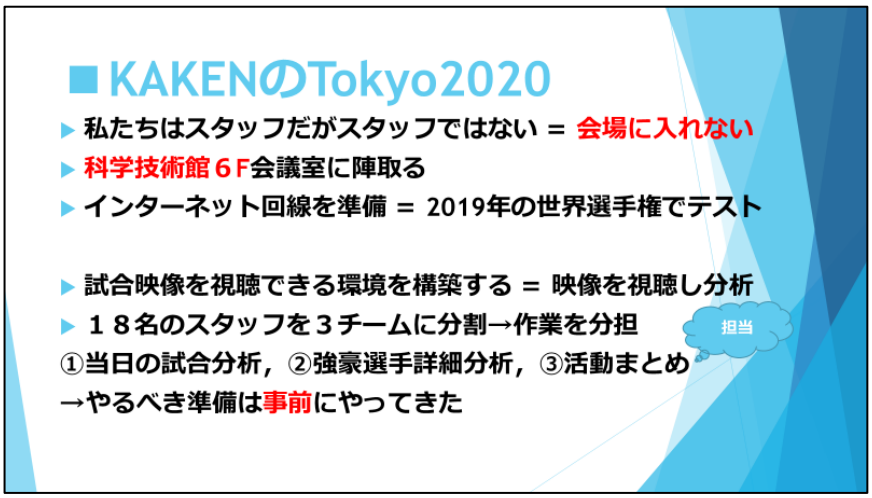
分析というと皆さんいろんなイメージをお持ちと思いますが、ここでいう分析は、一般にゲームパフォーマンス分析といわれるもので、たとえば技の回数、頻度とか、右なのか左なのかという方向の頻度、それを記録、蓄積して、そこから傾向を見つけようというゲームパフォーマンス分析と呼ばれるものをやっています。動作分析とはまた違ったものです。

実際にどういうものかというと、提示できるものとしてはこんなものがあります。一つは技をかけた方向、どちらの組手、右組なのか左組なのかを入力したり、あとは技、技の名前、どの技で投げているのかということを分析したりとか。一口に右、左と言っても、持つ位置は多様です。柔道着のどの部分、どの位置を持って技をかけたかということを分析、入力していく。どこを持ったか、右とか左とか、そんなに大事なのと思うかもしれませんが、この右外刈り（写真）、持つ位置が変われば、相手、青の選手の体勢の崩れ方大きく変わっていることがわかると思います。持つ位置が変われば技のかける仕組みが異なってくるので、防御の仕方も異なってきます。そういうところから、どこを持つか、どちらの方向の技をかけるかが非常に大きな要素になってくるのです。この観点に基づいてオリンピック期間中だけでなく、かなり前からずっと分析してきました。これが我々の TOKYO2020 への関わり方でした。

今日のテーマに即してお話しすると、我々のチーム「科研」が、どのように TOKYO2020 を迎えたのかというお話になります。私たちは全日本柔道連盟のスタッフではあります。全日本柔道連盟科学研究部に所属しているスタッフであり、日本オリンピック委員会の強化スタッフとして任命を受けています。賞状も僕の研究室に置いてあります。スタッフですが、今回会場には入れませんでした。またリオの時も、会場には入れなかったです。分析スタッフというのは会場、現場に入れないということが事前にわかっていました。ですので、我々は北の丸公園にある科学技術館 6 階の会議室に陣取って分析にあたりました。ここが日本武道館。九段下の駅から入ってきて日本武道館を過ぎていくと、ここに科学技術館があります。博物館みたいなものですが、そこの 6 階の会議室にこのような形で詰めて、毎日毎日仕事をしていました。

インターネット回線を設置し、試合映像を見られるようにして、三交代制で作業を分担しました。当日の

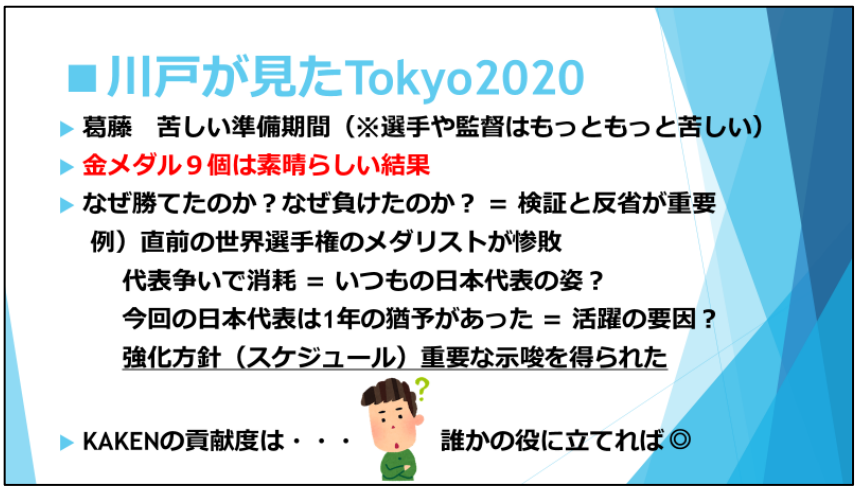
試合分析、強豪選手の分析、活動のまとめといったことをやってきました。ですけど、正直、当日はあまり仕事はしていません。いつも通りのことをずっとやってきただけで、すぐに映像データを出せる準備だけして待機しています。特別なことは特にせず、平常通りの運転でした。



ここで一つお話できることとして、このようなウェブサイトを構築し、地の利を生かした情報でサポートできました。日本ではモバイル通信ができますので、どこにいてもいつでも情報の確認ができます。そういった環境の構築に努めました。

赤く色づけた、レイティングというものをしました。あいつってなんか強いよね。その「なんか強いよね」を可視化する、視覚化するという試みを今回初めて行いました。出せる範囲としては、こういうもの（パワポ図）があります。

IJF の世界ランキング。当然これは強さに応じて得点が与えられるものですが、実際は、大会にどれだけ勝ったかというところでポイントが与えられます。これ 81 キロ級ですが、当時日本人で優勝した永瀬貴規選手、筑波大の出身で私の後輩でもありますが、永瀬選手は確かオリンピック当時は世界ランキング 5 位、6 位、そのあたりだと思います。ですが、実際にその強さをレイティングという手法を用いて可視化し、我々科研独自の世界ランキングを出し、優勝するだろうと予測を立てていました。実際にこのレイティング、かなりの精度で今回は当たりました。まだメディアの方には出してない情報もいくつかありますが、かなり高い精度でした。



これが最後のスライドです。この期間、選手・監督が一番辛かったのは、当然理解はしていましたが、一方で我々も非常に悩んだ時期でもありました。時間があって、かつ母国開催で潤沢な資金がある中で、それに似合った、そして世界一のチームとしてふさわしい準備が我々にできるのだろうか、できたのだろうか。かなり苦しい葛藤というか、自問自答の日々を過ごしているのが率直なところでした。心が何回か折れたくらいです。

勝てた要因についてです。金メダル 9 個というのは非常に素晴らしい結果だと思います。けれども、なぜ勝ったのかということを検証する必要があると思います。今回見えたのは、前々年、直前の世界選手権のメダリストは 8 割の確率で五輪でもメダルを取るという分析結果を我々は持っていました。実際には今回、直前の世界選手権のメダリストは惨敗しています。これはやはり 6 月にあった各国の代表争いにピークを持ってきて、それから 7 月末のオリンピックにまたピークを合わせるという過密スケジュールが原因だと我々は考えています。いつもの日本代表ってこうだよね、と言えます。

日本代表は、世界選手権が終わってヨーロッパ遠征が終わり、4 月に選抜体重別という国内の代表を決める試合があります。ここで結果を出した選手が、その年の 7 月、世界選手権であるとか、オリンピックに選ばれます。4 月までギリギリの闘いをして、一回ちょっと緩む期間があって、オリンピックになる。一年で 2 回ピークを持ってくるというのはなかなか厳しいです。それが、今まで勝てるはずなのに勝てなかった選手が多かった原因の一つと考えることができます。

今回は日本代表に一年間の猶予があったので、それが活躍の原因かなと私たちは考えています。

科研の貢献度は正直わかりません。我々がどれだけ貢献できたのかわかりませんが、どこかで誰かの役に立っていればいい。金メダル 9 個という成績の中に、我々のやったことが 1%、0.5%でもあればいいのかなと思いながら大会に参加させていただきました。

以上で私の話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

中塚：どうもありがとうございました。いきなり競技のど真ん中のお話をいただきました。そうか、オリンピックのど真ん中ではこういうことやってるのかということを、新鮮に感じられる方もいらっしゃったんじゃないかと思います。
川戸さんには一度月例サロンでお話いただいています（2016 年 1 月、10 月）。また、柔道の世界選手権（グランドスラム東京）をみんなで見に行って川戸さんに解説してもらい、その時に科研の仕事を紹介してもらったことがあります（2015 年 12 月）。私は予習できていたのですっと入ってきたのですが、川戸さん、こういうことはいつ頃からやっておられたのですか。

川戸：柔道界で科学研究部という組織が出来たのが昭和 57 年。陸上と、あとどこだったか、複数の種目で同時多発的に生まれたようです。JOC から、各 NF（競技団体）に科学的な部門を作りなさいという指示があってできたということです。実際に映像を撮り始めたというのはソウル以降。そこから蓄積が始まったと聞いています。

中塚：ありがとうございます。今回は柔道チームの監督がこういうことに熱心な方だったと聞いていますが。

川戸：そうですね。柔道界は良くも悪くも大学の先生が代表監督だったり強化委員長だったり、強化部門の役員を務められておりますので、我々が統計の値を出したものを理解していただけます。見慣れているので拒否反応がなく、すんなり受け入れてもらえるのが大きなポイントです。数字を分析して出した時、分析という言葉だけ聞いても難しいなと身構えることがあまりありません。そのあたりが、こういった我々の活動がすんなり受け入れてもらえる一つの要因かなと考えています。

中塚　どうもありがとうございます。みなさんから、お聞きしたいこともあるかと思いますが、チャットに書き込んでおいてもらって、前半戦の最後のところでまとめて取り上げます。
2 人目は赤城さんですが、嶋崎さんから赤城さんのことを紹介してもらってから水泳の話に入っていきたいと思います。

嶋崎：赤城翼さんです。国際武道大学体育学部 3 年、水泳部新チームのキャプテンです。国際武道大学の水泳部は、競泳も水球も、大会運営に熱心に従来から取り組んできています。高校生や中学生の大会、ジュニアの大会、いろいろなものに協力をしてきました。その中で今回、3 年生 2 人がオリンピックの競泳のボランティアでお手伝いに伺いました。その時の話を赤城さんにしていただきたいと思います。よろしくお願いします。

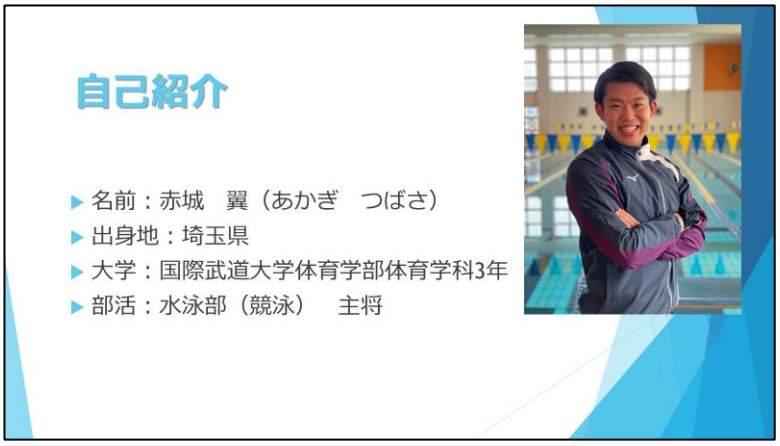
２．水泳競技のボランティアとして

赤城　翼（国際武道大学 3 年：水泳部）

はじめまして、赤城翼です。出身地は埼玉県川口市です。国際武道大学体育学部体育学科 3 年です。部活動は水泳部競泳で、新シーズンから主将を務めています。

さっそくオリンピックのことについて話していきます。私が行ったオリンピックのボランティアは競泳で、会場は辰巳の東京国際水泳場の近くにある東京アクアティクスセンターです。私自身は 7 月下旬から 8 月上旬まで、ほぼ毎日のように行きました。先ほども話があったように、武道大水泳部では運営補助などで競技会に行くことに対して力を入れています。他大学はどうかわかりませんが、お金のことなどを含めて運営体制を学ぶために数多くの競技会に参加しております。

こちらが、オリンピック当時の会場の様子です。私自身は「カゴ隊」という部署に所属しました。選手が入場し



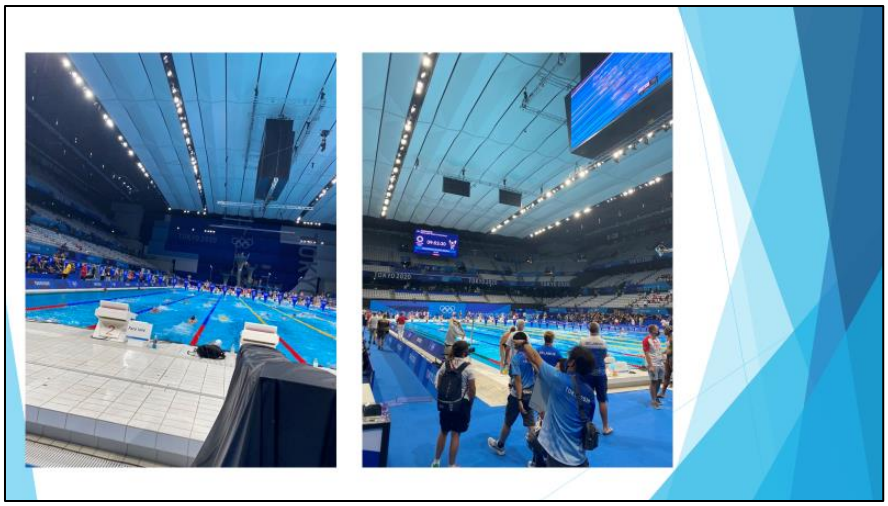
てきて、着ている服をカゴに入れて持ち帰る。選手が泳ぎ終わったら入れて持ち帰ってもらうというのを一連の流れとして行いました。「カゴ隊」については後ほど詳しく説明します。

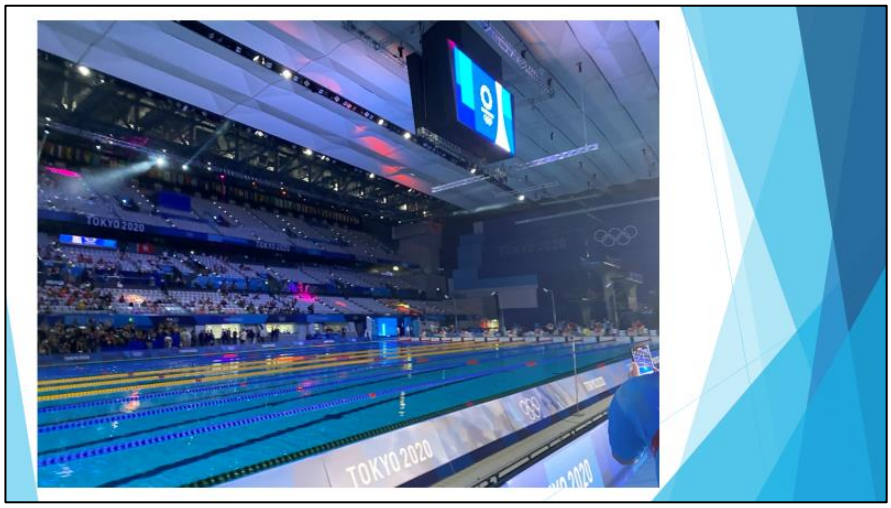
国内のいろんな大会等で競技役員をして来ましたが、オリンピックの会場は初めて来ました。国際大会がそもそも初めてで、ものすごく雰囲気も違います。各国の選手がいるので、日本語以外の言葉も聞こえて来るなと思いつつ、楽しみながらやらせていただきました。

実はボランティアの「カゴ隊」よりも一番印象に残っていることがあります。大会が始まる一日前に、この会場でリハーサルをやらせてもらいました。その時にコンペティションプールというメインプールで泳ぐ機会がありました。本当に泳ぐんだっていう実感がわかないままドキドキしつつワクワクしつつ泳がせてもらいました。選手役としてのリハーサルで、このプールで泳ぐのは本当に一生に一度かなと思いました。

泳いだ感想としては、泳ぎやすくはなかったと思います。タッチ板やスタート台が、国内の大会ではセイコーのものを使っていますが、オリンピックではオメガのものを使用していました。スタート台は少し掴みにくかったり蹴りにくかったり。あと自分が泳いで一番苦労したのはタッチ板です。少しでこぼこしていてうまく蹴れず、何度か足を取られそうになったイメージがありました。そんな中でもオリンピック選手はうまくやりながら泳いでいるんだなと思いました。

オリンピックプールでのリハーサルの最後に、決勝競技のリハーサルをしました。私はその中で 1 番速く泳ぐことができました。1 番速く泳ぐと、カメラマンの方もリハーサルをやっていたので、オリンピック当日のように近くまで来てくださり、モニターに顔が大きく映ったりします。プールサイドに上がると、オリンピック当日と一緒で取材エリアの中に入ります。取材エリアは大きく分けて 4 つほどあります。選手の息があがっている中で、プールの中の室温は 24.5°に設定され、かなり寒い状況の中でタオルとマスクだけを渡され、優勝した選手ですと 20～30 分位は服を着られない、ダウンプールにも行けないという状況です。自分もそれを体験させていただいたので、オリンピック選手はそこがきつかったんじゃないのかなと思いました。泳ぐのも大変ですが、そういった裏の場面というのも今回感じることができました。プールで泳ぐのはかなりいい経験だったと思っています。





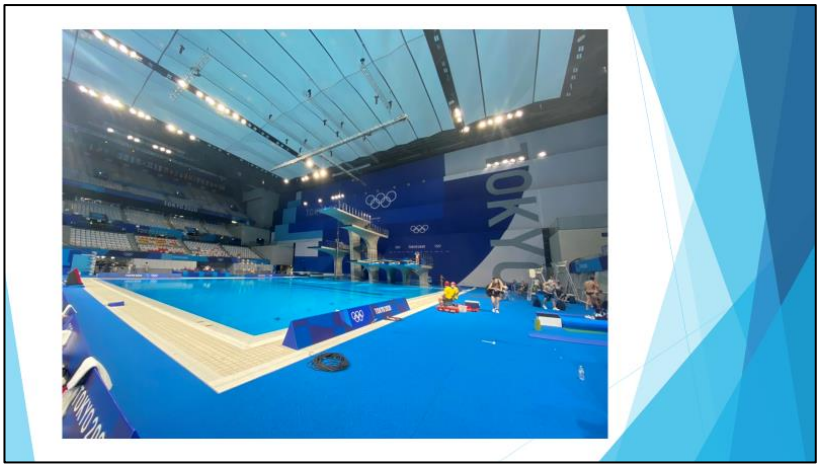
こちらがオリンピックの競技が始まる 5 分前の写真です。プロジェクションマッピングだったり照明だったり、すごい盛り上がりです。選手

たちは声が出せませんが、鳴り物のようなものでものすごく盛り上がっていたと思います。

先ほど言った「カゴ隊」は、このカゴの中に荷物、服等、選手が脱いだものを取り替えに行くという仕事です。この写真は大橋選手ですが、2 つ金メダルを取りました。僕は 2 回とも大橋選手の決勝の時の荷物を取り替えました。運が良かったのかどうかわかりませんが、そういうのチャンスに巡り合えました。「カゴ隊」は日本選手権とか大きな大会でもやっていますが、オリンピックという舞台で、テレビ放映もあり、なかなかの緊張感でやらせていただきました。私も、オリンピックの決勝の競技で、ものすごく盛り上げっている中で、鳥肌を立てながらカゴの中の荷物を取り替えていました。

こんな感じで、「カゴ隊」を中心にオリンピックに関わり、いつもの国内の大会とは違った視線でオリンピックを見ることができました。国内の大会ですと泳法だったり、折り返しのところというのを主にやっていますが、こうやって選手と間近で、カゴの荷物を替えたり、選手と話したりすることかが今までなかったのでよい経験になりましたし、やって良かったというのが一番です。

こうやってオリンピックに行かせていただいたのを機に、いろんな方とも話すことができました。自分自身も輪が広がったというか、今回のようにサロンにもお呼びいただいて、いい経験ができていると感じております。



こちらが各国のメディアの方が座っている席です。オリンピックが無観客でしたので、メディアの方のブースが予定よりも多く設置され、かなりのメディアの方がいらっしゃいました。

こちらはメインプールの隣のダイビングプールです。これは最後に自分が終わった後に撮った写真で、最後のスライドです。

このオリンピックを通して感じたものは、いつも国内の競技会でやっている競技役員とオリンピックの違いとしては、やはり会場の雰囲気です。あと、日本語が通じないということです。

中塚：どうもありがとうございました。水泳をされている方が世界一の舞台でサポート役に回り、しかもリハーサルで泳いでチャンピオンの経験までできー、素晴らしいですね。リハーサルは、ちゃんとやるんですね。

赤城：そうですね。自分たちも当日に行くまでリハーサルをやることを知らされておらず、水着だけ持ってこいとは言われましたけど、行ってみたらリハーサルをやるということでした。観客がいないので、運営の方々も混乱していたようで、かなり短いリハーサルになりました。

中塚：やはり一度やっておかないと、ゴールインした人をどのように誘導するかなど混乱しますよね。

赤城：はい：カメラマンが日本人でなく海外の方だったので、リハーサルを行わないとメディアの方がわからないっていうことです。

中塚：どうもありがとうございました。赤城さんへの質問はまた、チャットの方に書き込んでもらえればと思います。
では岸さんです。アンチ・ドーピング機構、それから A-GOAL などいろんなトピックが満載じゃないかなと思います。10 分間ですが、よろしくお願いします。

３．TOKYO2020 を振り返って

岸卓巨（一般社団法人 A-GOAL 代表理事／日本アンチ・ドーピング機構職員）

今晩はよろしくお願いします。10 分で収まるようにストップウォッチをセットして話します。
東京 2020 を振り返ってということで、私からは今回いろんな形でオリンピックに関わりましたが、日本アンチドーピング機構の職員で関わった部分、そして A-GOAL という NGO を立ち上げてその代表をやっておりまして、そこで関わった部分。この 2 つを中心にお話をしたいと思います。

（報告書への掲載はできません）

中塚：ありがとうございました。岸さんとはこの間、連絡が取りにくい状況もありましたが、本業、A-GOAL ともに、すごく意義深い活動に精力的に取り組んでおられたことが改めてわかります。世界と繋がる訳だから、昼も夜もありませんよね。

岸　：そうですね。実は今日もこの後、ナイジェリアと、今度の中継セミナーの打ち合わせで、9 時半ごろからフェイスブックライブを別な場所でやるんです。

中塚：ご苦労様です。

＜ハーフタイム（質疑応答）＞

中塚：前半戦は残り 10 分ぐらいですが、チャットの方にあった質問の中で柔道に関するものがあります。柔道日本代表は選手村に入らなかったそうですが、どのような理由からでしょうというものです。

川戸：その質問に答えるのはちょっと難しいです。というのも、推測になってしまうのですが、東京都内なので調整場所がたくさんあります。あえて選手村に入村する理由がなかったというのが、おそらく率直なところだと思います。我々も、入るかどうかという話は、今回は特に出てきませんでした。出てこなかったので、実際のところの選手、監督たちがどのような判断をしたのかまでは、私の方ではわかりかねます。

中塚：ありがとうございます。質問して下さったのは筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（CORE）事務局長の真田久さんです。真田さんから、お三方の話を聞いて、コメントいただければと思いますがいかがでしょう。

真田：どうもありがとうございます。実際の現場でどんなことが行われたかのかがわかりました。それぞれ現場で見られたことを、今後どのように活かしていけるのかを進めていただければと思いました。

中塚：ありがとうございます。この後話していただく小松さんから、水泳のコロナ対策について質問があります。赤城さん、どうですか。

赤城：コロナ対策としては、自分たち学生のグループの中には「カゴ隊」のほかにマスクを配るグループがあり、選手が泳ぎ終わってすぐにマスクとタオルを渡す仕事をしていました。マスクをしてない時間を極力減らす。選手もそうですし、自分たちボランティアや役員の方々にもやっていました。消毒は、本当にいろんな場面でやっていたと思います。それ以外は、みなさんも日頃やってるかと思いますが、手洗い、うがいの徹底をしていました。

中塚：ありがとうございます。コロナ禍での大会ということで、ご苦労が多々あったかと思います。私から岸さんへ質問です。いろいろ計画していたことがコロナ禍でできなくなりました。例えば代々木公園。コロナがひどくなってきた中でパブリックビューイング会場の準備がはじまったころは、私などは一体何を考えているんだと憤っていましたが、一方で、当事者として準備を進めてきた方々は、スポーツの価値を皆さんに伝えていく貴重な場として考えておられたと思います。そのあたりの理念や理想とコロナの現実の間に立って、岸さんもたいへん苦労されたのではと思います。このことに関してコメントをいただければと思いますがいかがでしょう。

岸　：そうですね。なんでこの大会やるんだ、みたいな声はいろんな所で聞こえてきました。JADA の中や周辺でも、本当に大会できるのかっていう思いもありました。半信半疑でも準備をして来たというところはありました。やる意義もあるし、やらなくちゃいけない仕事だという思いがある一方で、いつこれが中止になるんだろうとも思いながら準備してきたところです。でも結局やれて、いま考えると、すごく良かったんじゃないかなと思います。

中塚：組織委員会の中にいる人も同じような状況だったようですね。中京大学の來田さんが 5 月の公開サロンに来られるときにも同じようなことを言っておられました。
ということで、もっともっと深めたい話ばかりですが、今日はいろんな方にいろんな話を紹介していただく企画です。前半戦はこれにて終了。いまのがハーフタイム。ここから後半戦に入ります。
後半は「市民の立場から」というくくりです。と言ってもいろんな関わり方があります。まずは、2020 年 10 月の月例サロンでボランティアのことを紹介してくださった小松章一さんから、無観客開催によるボランティアへの影響ということでお話いただきます。お願いします。

Ⅱ．後半：市民の立場から

４．無観客開催によるボランティアへの影響

小松章一（行政書士／TOKYO2020 ボランティア）

東京 2020 大会のフィールドキャストとシティキャストして、両方でボランティアやることになっていました。お客さんの対応だったのですが、それが無観客。どうなるか？　実際どうだったのか？

ということで報告をさせていただきます。

まず、東京 2020 大会の無観客とボランティアへの影響です。一部会場を除いて、感染防止対策として無観客の措置が取られました。7 月、私がシティキャストの研修に行った 2 日後、ウェアなどを取りに行った日に無観客が決まりました。この制服どうするんだという話です。隣の神宮球場では野球を有観客やっています。それはどうなの、というのが正直なところでした。

首都圏は無観客ですが、静岡、茨城、宮城は有観客です。お客さんを入れてできたところとできなかったところがまちまちでした。ボランティアのコミュニティがあり、活動の報告とか、なにもできなかったとか、まちまちの状態があり、温度差ができてしまいました。

私の担当は、フィールドキャストですと国立競技場でした。どのような活動の内容が変更になったのか。代わりの活動として、まず開会式のリハーサルに代わりました。開会式のリハーサルは 4 日間ありました。何のためにやるかというと、尺、実際にかかる時間を計ることです。我々が一番人数が多いボランティア、2000 人ぐらいです。何をやったかというと行進です。選手に代わって行進をしました。放送時間や、実際どれぐらい時間がかかるかを計るためにやりました。

開会式の時は、入場行進前の選手の激励がありいます。まず国立競技場脇の銀杏並木に選手村からのバスが着き、そこから国立競技場まで選手が歩いて行きます。本来ですと招待客、オリンピックのスポンサー、オリンピックファミリーが沿道に並んで激励をすることだったらしいのですが、それが中止になりました。その代わり、激励をボランティアにやってもらうということで、招待客の代わりに激励しました。

閉会式では選手が帰って来ると、バスはこちらです、お疲れ様でした、来てくれてありがとう、というように選手を誘導しました。

大会期間中は、絵画館前のバス乗降所、サブトラック、スタジアム間の誘導、案内、トイレはどこ、などの案内をしました。

あと、サブトラックですね。絵画館前の草野球場がサブトラックになりましたので、そのアクセスコントロールをしました。関係者以外立ち入り禁止なので、そのコントロールです。それから選手ラウンジの管理、室内練習場のクールダウン用のプールの管理などをしました。

一方シティキャストでは、元々は駅・空港での案内と最寄り駅から会場への案内、ライブビューイングが任務でした。私の担当は水泳会場。新木場や辰巳という最寄り駅から会場までの案内の予定でした。ところがその活動もなくなり、何をやったかというと、聖火台からの雑踏整理、有楽町にある東京スポーツスクエアや都庁にある展示の案内、応援ボードの作成、オンラインでの東京案内などです。私がやったのが、聖火台からの雑踏整理とパラリンピックの応援ボード作成でした。シティキャストの人数はすごく多かったのですが、仕事が少ないので抽選になり、一回も活動できない人もいました。

ボランティアのコロナ感染対策としては、PCR 検査をやりました。活動 4 回に対して 1 回やってくださいということでした。国立競技場の中に入るボランティアは、先ほどの赤城さんの話にもありましたが、毎日検査です。我々は 4 回につき 1 回です。マスクは必ず着用。食堂では黙って食べて下さいということでしたが、守れない方が非常に多かったです。

ボランティア対しては、東京都、組織委員会がレガシーとして、ボランティアの繋がりを今後につなげようしていました。東京都と日本財団がそれぞれポータルサイトを作り、今後東京でこういうボランティアがありますよと紹介をする流れになっています。

ボランティア視点での無観客開催に関する感想としては、活動ができた人とできなかった人で温度差が出たことがあります。特にシティキャストの場合、東京都がネットの掲示板を用意してくれましたが、喧々諤々、一触即発状態でした。活動ができた人とできなかった人、抽選に毎回応募したけれど外れてしまった人など。それに対してフィールドキャストは、きちんと活動の場を用意していただきました。そのあたりで差が出てしまったことが挙げられます。

個人的には選手と接することができたのがよかったです。元々観客対応予定だったのが無観客になり、逆に施設内の案内ということで選手と接することができました。非常に貴重な体験でした。

特にパラリンピックの場合です。車椅子や義足の選手もアスリートとして、一選手として接することができました。

全体的な感想ですが、やはり平和でないとできません。

そして、やはりオリンピックはオリンピック。いろんな国の方が来て、国立競技場での陸上競技でいろんな国の選手が競技に向かう姿勢が見られました。その中でケニアの選手がコロナで帰国したのが非常に残念でした。私からは以上です。

中塚：どうもありがとうございました。実際にボランティアの方はどのような体験をされたのだろうということに、皆さんもすごく興味があったのではと思います。
いまお聞きして「へえー」と思ったのは、シティキャストが抽選になったということです。どのタイミングで抽選していたのですか。

小松：5 日間ごとに、都庁、有楽町の東京スポーツスクエアで活動があるということで抽選をしました。一つのポジションに対して 10 人もいりませんから、どうしてもあふれてしまいます。

中塚：実際の会場で、ここのボランティアやらせてもらえませんかということで行くわけですか？

小松：いや、抽選の当選のメールが東京都から来て、じゃあ行ってくださいということです。

中塚：抽選そのものはオンラインでやるわけですね？

小松：いや、東京都の方で抽選をするということなんです。いついつやりますというので申し込みをして、人数が多かったので、東京都で抽選したということです。

中塚：たぶんボランティアを回す側も、相当大変だったのでしょうね。

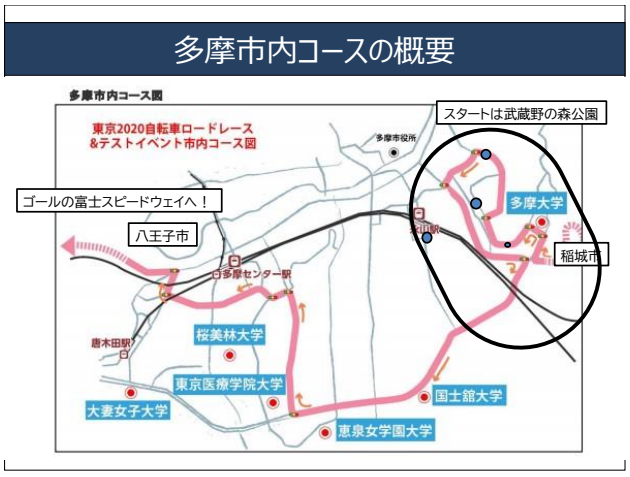
小松：本当に大変だったと思います。国立競技場のイベントサービスは我々だったのですが、それとファーストレスポンダー、要するに熱中症になった方の初期対応の方をあわせて、毎週 2,500 人ぐらいの規模でした。フィールドキャストに関しては、2,500 人に対してうまい具合に仕事を割り振り、特に大きなトラブルはなかったようです。けど東京都のシティキャストの場合、ポジションに対して人数があまりに多すぎたので混乱しましたね。

中塚：なるほど。ありがとうございます。質問も、既にいくつか来ていますが、チャットの方に書き込んでください。

それでは続けて、多摩大学の梅澤圭子さんです。多摩市が自転車のロードレースの会場になるので準備しているという話は、その始まりの頃からお聞きしていましたが、さてその話がどうなったのかということです。ではお願いします。

５．自転車競技「ロードレース」応援プロジェクト－６大学連携と多摩大学の活動報告

梅澤佳子（多摩大学）



多摩大学の梅澤です。私からは、①多摩市と市内 6 大学連携による応援イベントの取り組み、②新型コロナウイルス感染症拡大に伴う大会延期による活動の変化、③競技当日（2021 年 7 月 24 日・25 日）のコースサポーター（学生・教員）の声などを報告します。

2018 年 2 月に自転車競技「ロードレース」（以下「自転車ロード」と略す）のコースが発表されたのを契機に、2019 年 2 月、多摩市と多摩にキャンパスを置く 6 大学（桜美林大学、大妻女子大学、恵泉女子学園大学、国士舘大学、多摩大学、東京医療学園大学）が連携協定を結び、自転車ロード応援イベントを実施することになりました。6 大学の活動は主に 2 つ、多摩市オリ・パラ推進室が募集するコースサポーター（278 名）の内、学生 100 名（1 大学 17 名）を各大学で選考すること（申し込みは個人が行う）、「若者による気運醸成イベント」を 6 大学の学生達（各大学 30 名程度）が協力して実施することです。どちらも希望者が多く、抽選を行うほどの人気でした。

若者による気運醸成イベントは、2019 年・2020 年にそれぞれ 2 回予定していましたが、新型コロナウイルス感染症（以下 COVID-19 と記載）の感染拡大により、2019 年に 2 回実施後は中止となりました。第 1 回のイベントは、自転車ロードテストイベント（2019 年 7 月 21 日：日）とあわせて、多摩大学を会場に実施しました。午前中は、スポーツ史、オリンピックをご専門とされている田原淳子先生（国士舘大学）にお願いして「オリンピックを通じての国際交流・国際理解」をテーマにご講演いただきました。多摩市オリ・パラ推進室では自転車ロードの魅力を伝える様々なイベント行っていましたので、私はオリンピックの理念やオリンピックの価値を伝えたいと考え田原先生にお願いしました。講演には、近隣住民の方々と本学 1 年全員、専任教員が聴講しました。参加者からは「今日はよい話を聞いた。」「オリンピックについて初めてわかった。」と感想をいただきました。イベント運営に関わってくれている 6 大学の学生たちに届けることが出来なかったのが残念でした。昼にはキャンパスの横を走るテストイベントのロードレースを応援するという流れでした。学内には自転車ロード競技のコースを体験できるサイクリング VR 自転車体験や子ども向け面白自転車体験コーナー、ボッチャの体験コーナーを設置しました。秋には桜美林大学が中心となり多摩キャンパス（多摩センター）にてイベント開催を行いました。

残念ながらその後は 6 大学連携協議会、実行委員会も開催されることがなく、イベントは中止となりました。その後、2021 年開催が決定し、2021 年 1 月、多摩市オリ・パラ推進室から改めてコースサポーターの募集について連絡がありました。学生たちに呼びかけましたが 2 度目の緊急事態宣言期間だったこともあり、希望者はゼロでした。しかし、他大学は予想以上の募集があったということです。

多摩大学は 2020 年後期から 100%対面で講義をしていました。2021 年 4 月、改めてコースサポーター希望者を呼びかけたところ、3 名の学生と 1 名の教員が参加することになりました。

コースサポーターの学生の感想を紹介します。「良かった事は、オリンピックという舞台の運営を支えることができたこと。選手のインタビューでもボランティアに対する感謝の言葉が非常に嬉しかった。会場でも「頑張ってね！」「暑い中ありがとね」と励ましてくれる市民の方々がいた。賛否両論ある中、大会の最初を飾る競技であり、不安な面もあったが、一方、応援して下さる方もいて、安心し、嬉しかったことを覚えている。ただ、複雑だなと思ったのは、同じエリアを担当していた若者がアルバイトで、彼から「日給 1 万円くらいもらえるよ。」と言われたこと。ボランティアを辞退された方が多かったので致し方ないことだが、正直、「ちょっといいな」と思う気持ちもあった。オリンピックに関わるということは人生においてまたとない機会であり、非常に有意義であった。」

参加した教員の感想は次の通りです。「COVID-19 の感染拡大が急速に悪化していく状況にあって、コースの沿道は思った以上に混雑していた。コースサポーターの運営が始まる前に既にファンが押しかけており、文句を言われて大変だった。また、改めてコースサポーターを募集するなど俄作りになってしまったので、指揮系統がしっかりしておらず、パトロールカーにひかれそうになった。」

学生・教員の結論は「オリンピックに関わることは人生においてまたとない機会で、とても有意義だった。」ということでした。

最後に、東京 2020 オリ・パラ開催に向けて学内での活動について報告します。自転車ロードを迎えるにあたり、1 年生必修科目において、予め自転車ロード競技について理解を深めて応援しようと講演を企画しました。講師は近代ツール・ド・フランスに日本人として初めて出場し、今回、自転車ロード競技・山梨県アドバイザーを担当した今中大介氏です。自転車ロードとは、その魅力、戦略など、バイクを持ち込んで多岐にわたる話をしていただきました。また、1 年生の他の科目でも多摩市オリ・パラ推進室の方にお越しいただき、「今回、学生にできること」についてグループワークをするクラスもありました。コロナ前の話しです。

中塚：大変でしたね。途中まではお聞きしていた話ですが、なるほど、そういう展開でしたか。せっかくなので小松さんから、バイトの話やボランティアの話について、小松さんの耳に入っているところを補足していただけますか。

小松：多摩エリアの前のエリアが府中とか調布とか武蔵野森公園からのエリアです。そのエリアは東京マラソン財団がコースボランティアの担当をしてました。お話が合ったテストイベントで、私は府中の運転免許試験場の前でコースの担当をしていました。自転車ロードは大名行列みたいで面白いです。自転車が走り、その後をサポートカーが一斉に走り、なかなか壮観で面白かったですね。
学生さんのバイトは、確かに国立競技場も多かったです。リーダー、一応指示を出す側の役割は、朝一番から人がいなくなる終電までで大変ですよ、と我々にぼやいてました。

中塚：ありがとうございます。日給 1 万円の話ですが、ボランティアで募集された人は本来無報酬です。無観客で規模が縮小されボランティアがいなくなりますが、実際には人を配置しないといけません。そこでスポンサー

からの派遣だったり、文字どおりアルバイトが動員されたということだと理解していますが、よろしいですか、梅澤さん。

梅澤：はい、たぶんそういうことだと思います。多摩市のオリパラ推進室の方は、ボランティアの辞退が非常に多くて、大変苦労されていたようです。そんな中、変な話ですけどほかの大学では「ガクチカ」欲しさに応募してきて、うちで手が上がらなかった分をほかの大学がフォローしてくださったこともありました。結果的に派遣で入らないととても間に合わないような状況だったと思います。

小松：逆に我々のところは人が余ってましたけどね。イベントサービス、国立競技場とか埼玉スタジアム、スーパーアリーナとか埼玉とか、全く活動ができませんでした。

梅澤：実際そうですよね。6 大学連携は、コロナで延期になった瞬間、オリパラ推進室から一切話が来なくなったんです。もうそんなことやってられないというような状況が伝わってきます。街中でお会いしたりすると、多摩市のオリパラ推進室の皆さんが目の下に隈みたい。会うとお互いため息って形で。本当に、間に挟まれて相当苦しいんだろうなというのを実感していました。

中塚：守屋俊秀さんから追加情報です。チャットに書いてもらっていますが守屋さん、いいですか。

守屋：うちのチームメイトがアクアティクスセンターを担当してた会社の社長で、相当大変だったらしいです。赤城君は会ってないかな？

赤城：わからないですね。

小松：制服が同じなのでわからないですよね。

中塚：ウエアは一緒なんですね。

小松：たぶん派遣の人って会場の中に入れないんじゃないですか。

赤城：もしかすると派遣の人たちは、上のポロシャツだけ着て下がチノパンだったのでは。プールサイドには入れないけれど、そういう方はいました。。

守屋：サッカーの試合でいうとシミズスポーツのような会社。そういう立場ですね。

小松：シミズスポーツさんもいたみたいです、確かに。

中塚：どうもありがとうございました。スポーツイベントの支え方。とんでもない事態が発生した中で、どのように対処したのか。競技会はやるわけですから、人手は必要になってきます。なかなか難しいことが地方で起きていた、東京ですけど。東京都の地方で起きていたという話でした。

梅澤：地方がいい悪いわけじゃないですけど、東京都です、多摩市は、一応(笑)

中塚：ありがとうございました。では小池さん、お待たせしました。「オリンピズム再考」ということで。自己紹介の中で出てくるかと思いますが、NPO サロンが積極的に関わるオリンピック教育事業に有志として関わってくださっています。今回は、オリンピック・パラリンピックを迎える前に、いろんな取り組み、情報発信をされてきました。ではお願いします。

６．オリンピズム再考

小池靖（会社員／在さいたま市サッカー少年団指導者）

さいたま市に住んでおり、サッカー・スポーツ少年団の指導者で会社員です。ご案内がありましたとおり、サロンのオリンピック・パラリンピックに関連した取り組みのうち「クーベルタン-嘉納ユースフォーラム」があるのですが、2015 年から毎年携わっております。今年の会報誌『游 ASOBI』にも寄稿させていただきました。

今回発表することになった経緯ですが、高校生たちがオリンピック・パラリンピックって何かを議論するところに毎年参加していると、高校生が考えているのに大人が考えなくていいのかという動機づけをきただき、いろんな取り組みをさせていただいたということです。

本日お伝えしたいことは、東京 2020 は開催しましたけれど、成功したのか失敗したのか、何を基準に評価するべきなのか、オリンピック哲学に立ち返ってその価値を考えてみたいということです。そして、遊戯と、その源となるミーメーシス、模倣という役割が果たした人類の進化の歴史から、スポーツをとらえてみたい。本質に迫る試みから見えてきた世界はどんなものだったのかということです。あと IOC のガバナンス改革と価値の実現の道筋にも触れられたらいいなと思っています。

開催前にたくさんの反発がありました。そもそもこんな時に開催していいのか。緊急事態宣言で修学旅行や運動会もできなくなる中、オリンピックだけ特別なのかと。5 月時点での開催反対が 8 割、ワクチンが始まった 7 月時点で 5 割まで下がったと言いながら、激しい賛否両論がありました。

私自身はボランティアにも何も参加する機会がなかったのですが、何かできることがあるのではということで、それまで全く触ってなかった SNS のチャットに複数参加し、毎日いろんな人たちと議論をするのが 5 月からの日課になりました。非常に刺激をいただきました。

サッカー少年団の指導をするなどスポーツに馴染みのある人たちとの付き合いは多かったのですが、スポーツ関係者ではない世の中の人たちとそういうトーンで話をしていると、そもそも平和の祭典というけれど、こんな時にそんなことを言っていていいのかという、強い反発を受けました。

5 ヶ月前の 5 月のオンラインでのサロンでも言及がありましたが、そもそもオリンピック哲学とは何かということは、憲章の前文に書いてあります。生き方の創造の探求であると。平和というのは 2 番目に謳われており、3 番目に大会が頂点に達するけれどそれは恒久的な活動なのだということが謳われています。

パラリンピックについては、勇気、強い意志、インスピレーション、公平が謳われています。コロナとの関連では、創意工夫を凝らして限界に挑むということが、いま置かれた環境からするとオリンピックの理念以上に訴える部分があったと思いました。パラリンピックの開催式の際に「We the フィフティーン」というメッセージが流れ、私たちは世界を変えたい、変化はスポーツから始まりますと言っていました。パラリンピックの閉会式で、中継のアナウンサーが最後の言葉として「平和で穏やかで、誰もが自分らしくいられる社会、この夏を経験した私たちひとりひとりが考えていきたい」と言っていました。アナウンサーが言っていた「私たち」と、パーソンズ会長が言った「私たちは世界を変えたい」。この「私たち」というところに私はこだわってみたい。最後にここに触れさせていただきたいと思います。

Change Org という WEB 上で意見を表明するサイトに自分自身も「Now Renew the Olympism」という題名で、オリンピックの理念の貫徹と憲章の刷新を求めます、というメッセージをはじめ、複数の意見を表明しました。

掲示した意見を列挙すると以下の通りです；

・オリンピック憲章を改正し、オリンピックの理念を救え
・IOC ファミリーはコロナ禍での Noblesse Oblige を示せ（自ら訪日の自粛を表明すべき）
・「報道の自由により誘発される不自由」の回避を（入国者への例外なき 2 週間待機の励行を）
・開会式では喪章着用と黙祷の励行を（ワクチンの優先接種により犠牲になった方への配慮を）
・東京 2020 での新たなオリンピック旗の採用を（バブル方式を象徴する重ならない輪を）

統計によれば、この夏の全訪日外国人は、7 月に 5 万人、8 月は 26,000 人、9 月だと 18,000 人ということです。参加選手数はオリンピック 11,000 人、パラリンピック 4000 人なので、選手以外の関係者は相当絞られた大会になったということが、あとになってわかりました。

コロナの感染者ですが、オリンピックだと関係者を含めて 547 名、パラリンピックで 316 名ということで、心配されたほどの感染者数ではありませんでした。

それから辞退者が続出しました。北朝鮮が国として参加しなかった以外にも、ダスティン・ジョンソンやセリーナ・ウィリアムスなど辞退される方がいらっしゃいましたが、モスクワ五輪で見られたボイコットの流れにはなりませんでした。モスクワ五輪の時は、イギリスのセバスチャン・コーは参加しましたが、トーマス・バッハは、ドイツで公開討論を主導しましたが、結果として不参加を決めました。

その時、同じく選手だった柔道の山下さん、いまは JOC 会長ですが、山下さんは日本が参加しないことを決めたのでモスクワ大会に参加できなくなりました。『五輪ボイコットー幻のモスクワ 28 年目の証言』という本を読みましたが、山下会長は一度取材を断って、いろんな人に聞いて、それでもまだ自分に聞きたければもう一度来てくださいと言った。それでもう一度行ったら非常に口が重く、自分は過去は振り返らない主義だと、その程度のコメントしかない。私はこの本を読んで、非常にがっかりした記憶があります。

その山下さんが 6 月 28 日の会見で、選手たちに責任はないと言いました。また 1980 年には結構厳しいお手紙を頂戴して相当傷ついたということも会見時に語られました。選手たちが受けるべき責めはないんだ、JOC が受けるべきなんだと。心ないメッセージが届いて叩く。叩くのであれば、JOC 会長である私と組織委員会を叩いてほしいという言葉がありました。

選手ひとりひとりに何かしゃべれというのは確かに酷な話ですが、それ以前に、選手はいいタイムを出していい成績を出して頑張ってくれればいいのだと私も思ってました。けれど、選手一人ひとりに、なぜ大会に参加するのかということを、大会前に、まさに教育の現場で伝えていくことが必要だったのではないかと思います。私も、子どもたちにはそんなことまで話していませんでしたが、そもそもスポーツとは何なのかということを、もっともっと掘り下げて伝えていくことが日常から必要ではないのかということを、改めて思った次第です。

このような世論の盛り上がりに対して、先ほどいくつかに分けてメッセージを出した中で、報道者に対して規制があっても、守らない人達が多い、14 日間の待機が必要なのに特例でやるのはおかしいんじゃないのか、ということを挙げさせていただいたのが最も反応が大きく、26 名の賛同者を得ました。サロンのメンバーの中にも賛同してくださった方がおられます。この場を借りて御礼申し上げます。葬送儀礼として喪章を付けて参加するべきではないかということも、ウェブサイトに掲載しました。

ではそもそもオリンピックとは、スポーツは何かということについてです。古代オリンピック、オリンピアの祭典は BC 776 年から AD393 年まで行われましたが、当初は実はスポーツがプレーされていなかったという説があります。これは本当でしょうか、嘘でしょうか。

これは言葉の遊びなのですが、答えは本当なんです。なぜかというと、スポーツというのは 19 世紀に広がっていった言葉で、もともとはラテン語のデポルターレ。ギリシャで話された言葉はラテン語ではなく、ギリシャはローマに征服された後、ラテン語世界になっていきました。ラテン語の「遊び」です。ギリシャの時代ではまだ「スポーツ」とは言われてなかったということです。

日本でも「スポーツの日」は、以前は「体育の日」でした。スポーツを楽しみ、他者を尊重する精神を養う、培っていくということで、2019 年から呼称が変わっています。

オリンピックの精神は何なのか。古代ギリシャでは、プレーされたのはスポーツではなく、ムシケとギムナスティケ、その当時の文芸とか体育と呼ばれていたものが、競技あるいは披露されたということです。そういう文化を生んだギリシャでは、技術・技巧を示す言葉はテクネで、それがラテン語のアルスから英語のアートとなってやがて芸術と呼ばれていくようになったもので、このテクネもアルスも、もともとは学問そのものを意味していました。

中国語圏でも、美しいという漢字があります。神に捧げられた丸々と太った羊が、大きいとそれが美しいんだということで、捧げ物としての文芸体育が芸術という世界の美のかたちを作ってきたという経緯があります。そういうことも含めて、物事の本質に迫る作業が芸術でありスポーツであると解釈することができると私は考えています。

オリンピックの理念ですが、それは憲章に記載されているから意味があるということではありません。世界のいたるところで生活を送っている人たちの日常生活の中で日々鍛えられ、そこに新たな価値を付加されているという点にこそ価値の源泉があると私は考えます。

山下さんに語ってほしかった言葉として、こんなことを私は考えてみました。「想像もつかない外部と出会うことによって、TOKYO2020 を経て人類は改めて、オリンピックの理念と、スポーツの本質を明らかにすることになります。アジアで最初の IOC 委員である嘉納治五郎を輩出した国の責務として、その作業の一翼を担い、後世に、また世界につないでまいります。」

こんな言葉を言ってほしかったというのが私の期待でした。

そもそもスポーツとは何なのか、遊びとは何なのかということを、もうちょっと掘り下げて考えてみます。人類発展の歴史を辿ってみると、プラトンも、スポーツのルーツはリズムやダンスに置いていました。スポーツは共同のプレーをすることによって、個人の脳をお互いに結びつけ、自分と世界との関係を組み立て直す営みなんだと。身体活動、身体運動に柔軟さをもたらす働きが、脳の中の言葉の統合的働きと脳内で深く関わっているのです。

他人の行動を見るだけで相手の運動を写し取る技術、これがミーメーシスと称された模倣する能力なのですが、それは言語以前に身体が獲得していた能力であるということが、実践知の中に見出すことができるということを、渡部憲一さんという龍谷大学の名誉教授が述べておられます。また、山際さん、前の京大総長ですが、ゴリラの研究で有名な人です。この方は、人類は長い歴史の過程、進化の過程で脳の大きさをゴリラの 3 倍にした。容量は人類が暮らせる集団の規模に応じて増えてきた。しかも脳が現代人並みの大きさに達したのは、言葉が登場する以前だった。体の動きを他者に同調させ、リズムに乗りながら全体を調和させる音楽的なコミュニケーションが脳を大きくした。私たちが日々さまざまな集団を遍歴し、コンサートやスポーツを見て、見知らぬ人と一緒に心身を震わせることができるのは、人間だけが持つ不思議な同調能力のおかげだということを言ってます。

NHK-BS で 2019 年に放映された「遊びの科学」というカナダの放送局が作った番組は、非常に面白いものでした。遊びの本能は動物の進化においてとても重要なため、動物の間でもボディランゲージが発展しました。遊びは脳も鍛える。遊ばなかったハムスターは諦めが早くて、社会的敗北から立ち

上がれずに他者に恐怖心を抱くようになる。社会不安の兆候を示す。発育時期の遊びが欠けてしまうと、神経細胞の発達が乱雑になって、前頭葉皮質の発展が不十分となる。その結果、仲間と共同で行動するスキル、意思決定の能力に遅れが生じる。遊びの反対は仕事ではなくて抑鬱であると心理学者が言っています。

いまヨーロッパでは、5 人に 1 人が情緒不安定で 8 人に 1 人が精神疾患を抱えています。遊びの効用がもっと顧みられるべきです。アメリカの子どもたちの外遊びは一日 4 分から 7 分くらいしかなく、大体の時間はディスプレイに没頭しているとのこと。ある心理学者がテキサスの乱射事件を受けて三代前からの家庭環境を調査したところ、子ども時代にちゃんと遊ぶ経験をしていなかった為に暴力的な衝動を抑えられなくなったという事実を発見しました。6,000 人を追跡調査しても同じ結果が出ました。アメリカの小児学会が 2018 年に言ったことは、子どもに遊びを処方するようすべての医師に推奨する。これは治療ということではなく、予防的にそれを行う必要があるということだということです。発育時期の遊びが欠けると、神経細胞の発達が乱雑になって前頭葉皮質の発達が不十分となり、その結果、仲間と共同で行動するスキル、意思決定の能力に遅れが生じてしまうということです。

ここまでレビューして思ったことは、遊びによって仲間同士の絆を作っていく機能は、私とは何か、私たちとは何なのかということを問いかけているのではないかなということです。

遊びの、ビジネスへの応用ですけれども、技術開発が楽しくて仕方ないという会社、一心不乱に研究に打ち込むという企業文化を作った会社が、世界に通用する技術を開発して優良な企業に育って行く過程を、かつて金融機関に勤めていた時に見たことがあります。また、本田宗一郎さんホンダ自動車の創業者ですが、遊びたいから仕事をするんだというのがご自身の流儀でした。

遊びに含まれる人間性の要素は、本来ありたい自分、なりたい自分の姿に近いのではないか。遊びのメカニズムを仕事に取り組めた会社というのは、働きやすい職場に近づけるのではないか。それから、ちょっと違う観点ですけれども、幼児期の身体運動が非常に大事だということであれば、その量・質を高めることの重要性を社会全体の意識改革に結びつけることをビジネス化する企業が、もっともっと現れてきてもいいのではないかと感じています。

「アジェンダ 2020」が、2014 年末に IOC によって提唱されていますが、まだまだこれは不十分だと言われています。企業統治ということが一般の事業法人で言われていますが、NPO 法人のガバナンス、企業統治はどうなのでしょう。そこに対しても一定の研究があるようですが、日本だと会社法の改正で、いま上場会社と大企業については内部監査人協会のルール、基準に則った内部監査を年に一度実行するということが求められています。国際的にも IPPF という内部監査に関する国際フレームワークが、ウェブサイトで見られるようになっていますが、そこを IOC にも会計監査だけではなく、内部監査という内外から監視する枠組みも、何らかの形で適用してゆくことが求められるのではないかと思います。

今回のオリンピックで。スポンサーが非常に大事だ、スポンサーがなければ回らない、一方でそこが暴利をむさぼっているのではないかという批判がありました。企業のスポンサーシップのあり方は、五輪を支えていくためにはどういうことが必要なのかを再検討する時期に差し掛かっているのではないでしょうか。

コロナが起こって、結局開催したわけですが、16 日間で開催しなさいというのが五輪憲章に謳われているので、その憲章を改定しない限り、16 日間以上での開催は不可能です。そもそもそういうルールが、この時期にまだ有効なのか。プラン B を考えなければいけないのではないかという議論が、まだまだ足りないのではないかと思います。

オリンピックに 4 兆円かかったと言われていますが、費用明細を含めたエビデンスをきちっと取っておくということが、検証のためにも非常に大事なのではないかと思います。

2024 年では間に合わないかもしれませんが、これだけのコストを掛けて良かったのか、あるいはコロナのリスクにさらされている時に開催していいのかという議論は、開催して盛り上がったから良かった、で済ませてはいけない問題を孕んでいると思います。

その辺も含めて、コロナが終わった今ではありますが、第 32 オリンピアードはまだあと 3 年、パリまで続きます。まだまだ東京が果たさなければいけない役割はたくさん残されていると思います。

すみません、ちょっと長くなってしまいました。私の発表は以上でございます。

中塚：どうもありがとうございました。本当は 2020 年のオリンピアード一年目にオリンピック競技会をやることになっていたのが一年遅れとなりました。第 32 オリンピアードはパリまで続くわけですね。最後に言われたけど、我々が果たさねばならない使命はまだまだあるんじゃないかと。大事なご指摘だったと思います。
さて、駆け足で 6 人の方に 6 種類の話題をいただきました。小池さんからは本質的なテーマに触れてもらいました。今日出てきたいろんな話題を並べるだけで 1 冊の本ができるんじゃないかと思います。いろんな切り口があるのだということを、改めて感じました。

＜クロージング＞

中塚：あと 5 分ぐらいで本日の公開サロンはおしまいですが、最後にお 2 人からコメントをいただきたいと思います。1 人は、12 月の公開シンポジウムにご登壇いただくことを依頼してある読売新聞の川島健司さんです。読売新聞東京オリンピック・パラリンピック準備室長として、メディアの立場でいろんな情報に触れてこられた方に、今日の話の感想などを聞かせていただければと思います。最後の締めは、おそらくここで 1 番ヤングじゃないでしょうか。高校生が来てくれています。自由学園女子部の各務さんがお母さんと一緒に参加されています。昨年末の国内ユースフォーラムに参加し 7 名の日本代表に選ばれ、本来であれば今年の夏、キプロスで行われる予定だった国際ユースフォーラムに参加するはずでしたがこちらも一年延期です。いろんな人のいろんな話を聞いた若者の感想を最後に聞かせてください。

川島：読売新聞の川島でございます。今日は貴重なお話をありがとうございました。突然の中塚先生からの無茶ぶりで、何を話していいか困っておりますが、12 月にお話させていただくので今日はその準備というか、どんなお話をすればいいのかなと思い、皆様のお話を拝聴させていただきました。私はもともと運動部の記者でしたが、その後編集委員となり、スポーツに関することを取材して書いていました。2013 年に東京オリンピック・パラリンピックの開催が決まりましたが、17 年になって東京オリパラの準備を本格的に始めろということになって 4 年間、記者をどこに配置するか、どんな取材をやっていけばいいのか、そんなことを考える立場におりました。コロナという、誰も想像しなかったことが起きて1年延期になり、本当にオリンピックはできるのか、やっていいのか、どういう報道をしていけばいいのか、とても迷いました。その話は 5 分ぐらいでは話せないので少し整理して、12 月のシンポジウムでお話しします。
終わってみて思うのは、私の立場では、やれたのは良かったなと。自分がずっとその準備に携わったこともあり、やれなかったらあまりにも虚しかったと思う。もちろん開催に賛成の方、反対な方がいらっしゃいますが、やってみたからこそわかったことも多かったと思います。今日、本当にいろんな立場のお話しを伺って、いろんな関わり方があって興味深かったです。私も 12 月には少し整理して、どんなことに悩んで、どのように決断し、オリンピック・パラリンピックの報道に携わってきたかをお話したいと思います。

中塚：無茶ぶりにお答えいただきありがとうございます。続きは 12 月 11 日の公開シンポジウムでよろしくお願いします。では各務吏織さん。お母さんの山田恵子さんは 2 年前、フランスのマコンで開かれた国際ユースフォーラムに引率教員として参加してくだいました。では吏織さん、全体を振り返ってどうですか。

各務：色々なお話をありがとうございました。私は今回のオリンピックを楽しみにしていたので、開催したことは個人的にはすごく嬉しかったです。ほぼ毎日テレビで見ていたのですが、今回、もっと近くで関わられた方々のお話を聞くことができてとても貴重な機会になりました。いままでだったらオリンピックを見るときはスポーツとして、試合として見ることが多かったです。私自身も国内 YF などに参加してオリンピックの価値、友情・卓越・尊敬とか、オリンピックの目的の 1 つである国際交流のこととかを学んだので、テレビ越しであっても今までとは違う視点で見られた、そういうオリンピック・パラリンピックでした。
クラスメートでテニスのボールパーソン（ボランティア）をした人がいました。私自身も習い事で日本舞踊をやっている関係でオリンピック・パラリンピック選手の応援をする企画に参加し、日本舞踊の発表をする機会があり、様々な形で関われてよかったなと思いました。
始まる前はコロナのことがあって、ただやってほしいと言うだけでなく、問題がいろいろあったと思います。開催されて、みんなでよかったねと話すこともあり、できて良かったと思います。ありがとうございました。

中塚：ありがとうございます。こういうコメントを聞くと心が洗われるような気がします。
もっといろんな方、皆さんからコメントをいただきたいところですが、一応ここで中締めといたします。残れる方はオンライン懇親会で続きを楽しみましょう。

以上